

## 巻頭言

# 我が国におけるがん発生の現状と 市立札幌病院のがん治療の取り組み

市立札幌病院副院長  
産婦人科部長

晴山 仁志



2013年の我が国の平均寿命は女性86.61歳と伸び、男性はついに80歳を超え80.21歳となりました。死因のトップはがんで、約30%の人が亡くなり、2位が心疾患、3位が脳血管疾患です。1981年から、我が国の死因の第1位にがんが居座り続け、生涯のがん罹患率は男性では60%、女性では45%と試算されています。

がんは老化・エイジングだけでなく種々の環境要因への暴露の蓄積、遺伝子要因も関与して長い潜伏期を経て生じます。最大の宿主要因は加齢現象である以上、長寿国の我が国では当然増加する国民病と言っても過言ではないと思います。国立がん研究センターは今年の7月に、2014年に新たにがんと診断される人は88万2200人、がんで死亡する人は36万7100人と予測しました。高齢化を背景に、患者数は2010年に比べて約7万7000人増え、死亡者数は2012年よりも約6000人増加すると発表しています。予測患者数の首位は胃がん13万7000人、肺がん12万9500人、3位が大腸がん12万8500人であり、肺がんと大腸がんが近い将来、胃がんを上回ると予想されます。予測死亡者数の首位は肺がんで7万6500人であり、がん発症の危険を高める喫煙者が多い世代の高齢化が背景にあるとみられます。2位が胃がんで5万3000人、3位が大腸がんで4万9500人、4位が膵臓がん3万1900人です。膵臓がんは2012年の死亡者順位が4位である肝臓がんに入れ替わりました。治療の難しい膵臓がんは高齢化の影響を除いても増加傾向にあり、喫煙と糖尿病が危険因子と言われています。

市立札幌病院は2005年1月に地域がん診療連携拠点病院の指定を受けました。2013年に新たに入院したがん患者数は3364人で、全入院患者の21.9%を占めます。その中で、外科手術件数は2134件、がん化学療法は5116件、放射線治療は1632件を数えます。昔とは異なり、がん治療も多様化、個別化する傾向にあります。個々のがん患者のさまざまな症状、状態および治療方針などを、お互いに意見交換、共有し、より適切ながん医療を提供できることを目的にカンサーボードを設置しています。専門的な知識と技能を有する各診療科の医師、看護師、薬剤師、放射線技師、検査技師、理学療法士、緩和ケア内科スタッフ、事務スタッフなどが参集し定期的に開催しています。現在、消化器がんカンサーボードと乳がんカンサーボードは毎月、肺がんカンサーボードは年に3回行っています。

以前はがんに罹患すれば即、死に直結と言われていましたが、がんにおける医療の進歩は著しく、まさに日進月歩です。治療のメインである外科手術は、より侵襲性が小さく、生活の質(QOL)を重視した内視鏡手術が増加し、ダヴィンチを含めた新しい機器による治療も行われています。化学療法は新しい抗がん剤が開発され、がんの種類によっては分子標的薬も使用されています。放射線療法は化学療法との併用を含め、強度変調放射線治療(IMRT)も開始し、根治性が高く、副作用の少ない新しい放射線治療を行っています。

以上、市立札幌病院は緻密に連携して、安心して信頼される質の高い医療を提供していきますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



【多職種による乳がんカンサーボード】